



こうべ森の学校だより

No.103

2022年6月号

発行人:こうべ森の学校 編集委員会

発行所:神戸市北区山田町下谷上上中一里山 4-1

神戸市森林整備事務所内

Tel:078-321-5937 Fax:078-371-1087

5月例会



天気が優れないにも関わらず、32名が集合。

今月も、2名が新規加入 !!

西山付近
参加者全員で、笹刈りに
全集中 !!





初参加者2名は、混み茂った中に入り



明るくなった作業地を振り返り 「自画自賛」

右側では、ドヤ顔が !!



体験学習の受入れ

市内フリースクールより、総合学習テーマ(山と私たち:里山と人の関係を学ぶ)の一環で、参加したいとの依頼があり、6月7日(火)に受入れました。

参加児童・生徒は、小学生2人・中学生8人(男子7人・女子3人)と、先生2名です。この先生方には、活動内容を予め知っていただくため、事前に、初参加講習受講済みです。森学の参加者は、13名で、マンツーマン体制で臨みました。13時ごろには、帰途につきたいとのことで、午前中の作業となりました。

ログに集合、パワーポイントで概要・安全作業の講習後。体操をして、森に入ります。最初は戸惑った様子も見られていたけど、徐々に慣れてきたのか、あちらこちらから笑い声も聞こえました。1時間半程の作業でしたが、終わる頃には、道具の使い方も様になっていて、物足りない様子も見られました。でも、皆さんが楽しそうに作業されていたのが、なによりでした。



まずは全員で準備体操です



丁寧に枝払い中

奥まで、見通せるよう
になりましたよ!!

お疲れ様でした



アナベル（アメリカアジサイ）が成長しています



今年4月の差し穂、一年生です



3年目の、開花したアナベルが成長中です



今年の差し挿(下方)と
三年目の開花状況です



6月13日現在の森林植物園内アナベルの丘の開花状況です
今月下旬以降に、見ごろを迎えそうです

前回の、月例会報告

日付	参加者	司会	森の手入れ	木工工作	自然観察	苗づくり
5月14日(土)	32名	谷本さん	7名	6名	10名	9名

■ 東お多福山草原再生・保全活動

5月18日(水)、 参加者21名(森学5名)

■ お知らせ掲示板

- ♣ こうべ森の小学校 & 森の幼稚園
- ♣ 摩耶の森クラブ
(活動日の問合せは、神戸市森林整備事務所に)

- ♣ ボランティア保険に加入していますか!?
森の手入れ作業中の事故に備えて「兵庫県
ボランティア・市民活動災害共済保険」への加入
手続きをされていますか。掛金は500円の負担で、
補償期間は4月1日から翌年3月31日までです。
受付窓口は、お住いの市区町社会福祉協議会です



当日、6時55分のNHK-TVで、兵庫県南部の
降水確率が60%以上の場合は、活動中止です

活動の開催予定

- ♣ 月例会 7月9日(土)8月21日(日)、
午前中は、全員で森の手入れ、
午後は、森の手入れ・自然観察・木工・
苗作りから、選択を予定しています。
- ♣ 火・木・土曜日も、活動していますよ!!

こうべ森の学校は、発足当初から、物心両面
にわたり、伊藤ハム株式会社の社会貢献活動
の支援を受けて、運営しています。

< 編集後記 >

コロナ禍がはじまってもう三年目。いろんな制限が、こんなに長引くとは思っていませんでした。最大の痛手は、旅行ができなくなったことでしたが、身体で旅するかわりに、本を読んで脳内旅行をすることが多くなりました。

そしてつい最近、十年ぶりぐらいに、三浦しをんの『神去(かむさり)なあなあ日常』という小説を読み返しました。これは“林業エンターテインメント小説の傑作”と紹介されていたのに惹かれて読んで、とてもおもしろかったのですが、その印象だけが残っていて、内容はすっかり忘れていました。十年ぶりに読み返してみると、やっぱり本当におもしろい、いい話でした。これは、横浜で生まれ育った十八歳の「俺」こと平野勇氣くんが主人公。高校三年になっても特にやりたいこともなく、勉強も好きでないで、卒業後も当分フリーターでいいかと思っていた勇氣ですが、卒業式の日、担任教師と親との共謀により、式が終わって帰宅すると即刻、新幹線に乗せられ、三重県の山奥の神去(かむさり、と読みます)村に送られます。無気力な息子の行く末を心配した親と担任のはからいで、国の「緑の雇用」制度に勝手に応募され、林業研修生として聞いたこともないド田舎の、しかもとんでもない山奥の村に送りこまれたのです。

当初は村人(こわもてのおっさんたち)の神去弁やワイルドな暮らしぶりに目を白黒させていた都会っ子の勇氣ですが、チェーンソーの使い方を教わり、山仕事になじんでいくにつれ、少しずつ変わっていきます……

読者としての私も、この十年、森学で間伐やササ刈り体験を続けているおかげで、十年前よりも実感をもってこの小説を楽しむことができました。三浦しをんは何を読んでもおもしろい小説の名手で、辞書編集者のリアルな実態を題材にして映画にもなった『舟を編む』も彼女の作品です。この神去村の話は、続編の『神去なあなあ夜話』も出ています。これは単なる過疎地の山村の林業というだけでなく、山と共に生きる民族の精神の根源にまで迫っていく物語です。もし興味を持たれたら、絶対に読んで損はないと思います。

編集後記のネタがないので、こんな本の感想文になりました。そろそろコロナが落ち着いて、旅行に行ったり、みんなで食べたり飲んだりできる日が、来ることを願ってやみません。



(佐脇 遥子)